

2025 年 1 月

食料安全保障月報

(第 43 号)



令和 7 年 1 月 31 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2025 年 1 月食料安全保障月報（第 43 号）

目 次

概要編

I	2025 年 1 月の主な動き	1
II	2025 年 1 月の穀物等の国際価格の動向	4
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	4
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	4
V	今月の注目情報「EU における小麦の生産・輸出入動向」	5

（資料）

1－1～3	穀物等の主要輸出国の生産量（過去 10 年平均との増減比較）	1 0
1－4	穀物等の国際価格の動向	1 3
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 4
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 5
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 7
5	食品小売価格の動向	2 1
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	2 2
7	FAO 食料価格指数	2 4

今月のコラム

「タイのコメ貿易について」	2 5
---------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
<米国>	2025/26 年度の冬小麦の作付面積は前年度から 2.2%増加の見込み	
<カナダ>	2025/26 年度の作付面積は前年度から 1.8%増加の見込み (AAFC)	
<豪州>	2024/25 年度の輸出量は前年度から増加し 21.9 百万トンの見込み (ABARES)	
<EU27>	2024/25 年度の生産量は前月から下方修正され 119.1 百万トンの見込み (EC)	
<ロシア>	2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 46.0 百万トンの見込み	
<ウクライナ>	2024/25 年度の輸出量は前月から下方修正され 16.0 百万トンの見込み	
<中国>	2024/25 年度の輸入量は前月から下方修正され 10.5 百万トンの見込み	

2	とうもろこし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	9
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は史上最高の前年度から 3.1%減少する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 4.1%増加する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.0%増加する見込み	
	＜ウクライナ＞2024/25 年度の生産量は、前年度より 18.5%減少する見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.1%増加する見込み	
3	コメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
	＜タイ＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 1.9%増加する見込み	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.5%増加する見込み	
	＜インド＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 5.2%増加する見込み	
	＜ベトナム＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度に比べ 0.8%増加する見込み	
II	油糧種子	
	大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
	＜米国＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 4.9%増加する見込み	
	＜ブラジル＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 10.5%増加する見込み	
	＜カナダ＞ 2024/25 年度の生産量は前年度から 8.4%増加する見込み (AAFC)	
	＜中国＞ 2024/25 年度の生産量は、史上最高の前年度から 0.9%減少する見込み	
	＜アルゼンチン＞ 2024/25 年度の生産量は、前年度から 7.9%増加する見込み	
	(参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について (2024/25 年度)・・・	27
	(参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・	27
	(参考3) 各国のクロップカレンダー一覧 (主要品目毎) ・・・・・・・・	28

【利用上の注意】

表紙写真：フィリピン リザール県テレスサ市ドルムバヤン村の水田。農業組合の圃場では乾季米が順調に生長している。(リザール県 2025 年 1 月 8 日) 撮影者：八木橋史子

(概要編)

I 2025 年 1 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球での収穫がほぼ終了した一方、南半球では大豆等の作物が生育期を迎えている。

2024/25 年度の状況について、品目別にみると、1 月の米国農務省 (USDA) の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシア、英国で単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、インドで単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、中国、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に史上最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU 向け輸出の動向も含め注視が必要。

とうもろこしについては、中国、ブラジル、南アフリカで単収・収穫面積ともに前年度より増加するものの、米国で収穫面積が減少、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、EU、ロシアで単収が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国、アルゼンチンで単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO (国連食糧農業機関) が公表している食料価格指数については、主に砂糖、乳製品、植物油、穀物の価格の低下等により、11 月の 127.6 から、12 月(最新値)は 127.0 に下落 (参考: 2023 年 12 月 119.1、2022 年 12 月 131.8、2021 年 12 月 133.7、2020 年 12 月 108.5)。海上運賃については、バルチック海運指数 (穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数) が、直近 5 カ年の平均値の約 5 割の水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2025 年 1 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について (農林水産省 HP)

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 1 月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの単収が減少することから、前年度より 0.4%減少し 2,290 万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より 18%減少し 2,650 万トンとなる見込み。2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より 14%減少し 1,600 万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より 22%減少し 2,300 万トンとなる見込み。

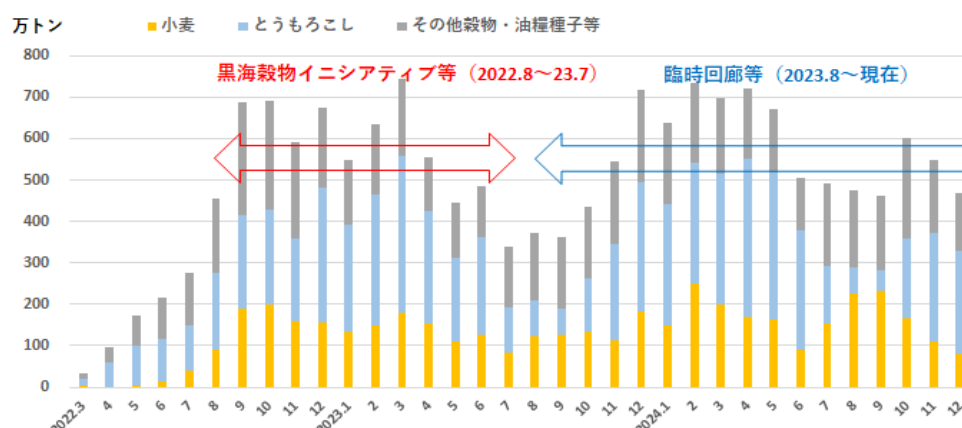
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024/25 年度の小麦及びとうもろこしの収穫作業は終了した。また、2025/26 年度の冬小麦の作付作業も終了している。ウクライナ気象センターによれば、12 月上旬から中旬にかけて温暖な天候に恵まれ、11 月上旬に一旦生長を停止していた冬小麦も最低限越冬に耐えうる状態まで生長した。12 月末時点、大部分の圃場で冬小麦の作柄は並みから良好。今後、圃場がスノーカバー（積雪）に覆われ、気温と地中温度に大きな変動がなければ、冬枯れ等の被害を最小限に抑えて冬を越すことができると予想される。

臨時回廊からの輸出状況

2022 年 7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年 8 月以降、オデーサ港等 3 港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ビブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023 年 7 月 17 日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022 年 8 月～23 年 7 月）は、穀物・油糧種子等 6,846 万トン（うち、小麦 1,728 万トン、とうもろこし 2,949 万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023 年 8 月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU 域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022 年 3 月～2024 年 12 月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

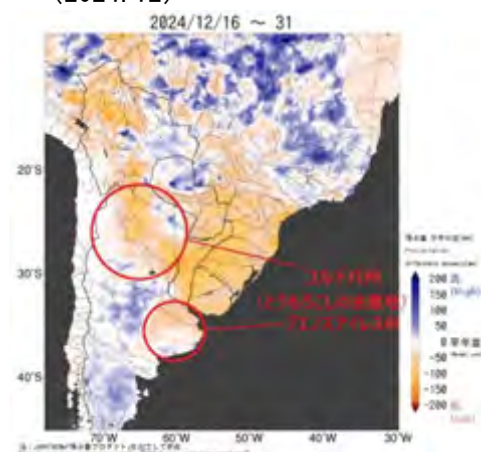
注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 アルゼンチン：とうもろこしの作付作業が終盤

USDA によれば、2024/25 年度のアルゼンチンのとうもろこし生産量は 5,100 万トンと、前年度から 2 % 増加する見込み。単収は 7.97 トン/ヘクタールと、前年度から 12% 増加する見込み。収穫面積は 640 万ヘクタールと、前年度から 9 % 減少する見込み。

2024 年 12 月末現在、とうもろこしの作付進捗率は約 87% と平年を上回っている。これは、昨年、遅植えとうもろこしに病害虫のヨコバイが大量発生し、作柄が悪化した一方、早植えとうもろこしは被害を免れたことから、多くの農家が例年より多くの早植えとうもろこしを作付けたことによる。現在、作付期及び生育初期の段階では十分な土壌水分量に恵まれたものの、12 月末にかけて乾燥が続いており、更なる降雨が必要となっている。

図：アルゼンチンの降雨量（平年対差）
(2024. 12)



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

2 ロシア：2024/25 年度の穀物輸出枠が過去 5 年間で最小

USDA によれば、世界最大の小麦輸出国であるロシアの 2024/25 年度の小麦輸出量は 4,600 万トンと、前月予測から 100 万トン下方修正され、前年度から 17% 減少する見込み。2024 年 12 月 20 日、ロシア政府は 2024/25 年度後半（2025 年 2 月 15 日～6 月 30 日）の穀物輸出枠を発表。輸出枠は 1,060 万トンと過去 5 年で最小となる。

ロシアの 2024/25 年度の小麦生産量は 8,150 万トンと、前年度比 11% 減の見込み。ロシアは、期首在庫の減少により 2024/25 年度の供給量は前年度比 12% 減となっているにもかかわらず、EU の輸出余力の減少により年度前半は記録的な輸出量となった。現地輸送会社によれば、2024 年 7 月～12 月のロシアの小麦輸出量は 2,940 万トンに達し、前年度の記録（2,770 万トン）を上回った。ロシアの旺盛な小麦輸出により国内供給が枯渇しており、現地情報会社によれば、12 月 1 日現在の農場小麦在庫量は前年同期比 25% 減となっている。国内供給の維持と食料価格のインフレ抑制のため、ロシア政府は年度後半に過去 5 年で最小となる穀物輸出枠を適用するとともに小麦の可変輸出関税を課している。当該措置によりロシアの小麦輸出量は 2 月から減少し、ロシア産小麦の主要輸入国であるエジプト、トルコ、バングラデシュ、サウジアラビアは、アルゼンチン、豪州、EU 等の他の小麦供給国に輸入先を振り替える必要があるとみられている。

3 米国：2024/25 年度の大豆粕の輸出量が過去最高を記録

USDA によれば、2024/25 年度、米国は世界第 2 位の大豆粕の生産・消費国であり、アルゼンチン、ブラジルに次ぐ世界第 3 位の大豆粕の輸出国となる見込み。米国の大豆粕圧搾能力の拡大が米国産大豆粕の大量供給と競争力のある価格に繋がるため、世界の大豆粕貿易における米国のシェアは拡大すると見込まれる。

従来は大豆粕の需要が大豆の圧搾量を牽引してきたが、近年はバイオマス由来のディーゼル燃料生産に利用される大豆油の需要増が大豆圧搾量の拡大を後押ししている。2023/24 年度の米国産大豆の圧搾量は、過去最高の 6,232 万トンに達し、2022/23 年度より 204 万トン増加し、過去 5 年平均を 6 % 上回った。これにより 2023/24 年度の大豆粕の生産量は過去最高の 4,912 万トンに達した。2024/25 年度も、米国の加工業者はバイオマス由来のディーゼル燃料として大豆油の需要増に対応するため、引き続き圧搾量を増加させることから、大豆粕の生産量と輸出可能な供給量も増加する見込み。

Ⅱ 2025 年 1 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、12月末、200ドル/トン台前半で推移。1月に入り、ドル高や低調な輸出等を受けて190ドル/トン台半ばまで下落したものの、低温による米国産冬小麦の作柄悪化懸念や大豆及びとうもろこしのつれ高等を受けて上昇し、1月中旬現在、190ドル/トン台後半で推移。

とうもろこしは、12月末、180ドル/トン台前半で推移。1月に入り、アルゼンチンの高湿乾燥及び米国農務省需給報告での米国産生産量の引下げ等を受けて上昇し、1月中旬現在、190ドル/トン台前半で推移。

コメは、12月末、530ドル/トン台後半で推移。1月に入り、タイのバーツ安やアジア及びアフリカからの需要低迷を受けて下落し、1月中旬現在、480ドル/トン台後半で推移。

大豆は、12月末、360ドル/トン台後半で推移。1月に入り、アルゼンチンの高湿乾燥及び米国農務省需給報告での米国産の生産量引下げ等を受けて380ドル/トン台前半まで上昇したものの、アルゼンチンの降雨予報を背景に下落し、1月中旬現在、370ドル/トン台後半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

Ⅲ 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より0.01%増の28.20億トン。消費量は、前年度より1.4%増の28.55億トンとなり、生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り26.7%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.20億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.55億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、コメで増加も、小麦、とうもろこしで減少し、穀物全体で減少し、5.00億トンの見込み。

期末在庫量は、7.61億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は1月のUSDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

Ⅳ 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り6.80億トン。消費量は前年度を上回り6.65億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る21.7%となる見込み。

(注：数値は1月のUSDA「Oilseeds: World Markets and Trade」等による)

V 今月の注目情報：EUにおける小麦の生産・輸出入動向

EUの2024/25年度の小麦の収穫は終了し、欧州委員会の12月19日の情報によれば、2024/25年度の小麦の生産量は119.1百万トンと前年度132.6百万トンから10.2%減となり、2012/13年度（120.1百万トン）以来の低水準となると見込まれている。生産量が大きく減少する中で、EUにおける小麦の輸出入の見通しをまとめた。

注：文中の「2024/25年度」等は市場年度で、EUの小麦は2024年7月から2025年6月。（品目別需給編P.27参照）。

1 小麦の生産動向

（1）EUの生産動向

欧州委員会（EC）によれば、2024/25年度の小麦の生産量は119.1百万トンと、前年度（132.6百万トン）と比べ10.2%減、過去10年平均（133.9百万トン）と比べても11.1%減となり、2012/13年度（120.1百万トン）以来の低水準となる見込み。2023年秋の作付時の降雨や、作付け以降の降雨過多と日照不足により収穫面積が22.3百万ヘクタールと前年度から7.9%減少するとともに、単収も5.34トン/ヘクタールと前年度から2.5%減少することによる。

種類別には、EUでは小麦の生産量の9割以上を普通小麦が占め、その他にデュラム小麦が栽培されているが、2024/25年度の普通小麦の生産量は111.9百万トンと前年度（125.2百万トン）と比べ10.6%減、デュラム小麦も7.2百万トンと前年度（7.4百万トン）と比べ2.7%減となる見込み（図1）。

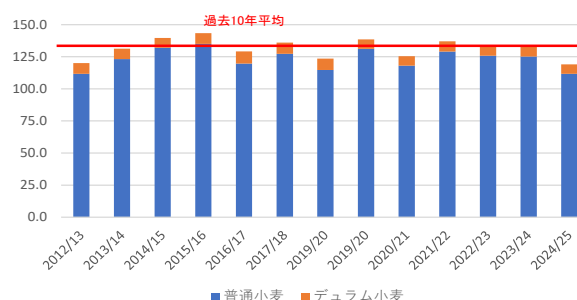
（2）国別の生産動向

ECによれば、近年の国別小麦生産量は、1位フランス、2位ドイツ、3位ポーランドの順となっており、2024/25年度の小麦生産量はフランスが26.6百万トンと、前年度（36.1百万トン）と比べ26.5%減、ドイツが18.5百万トンと前年度（21.4百万トン）と比べ13.4%減、ポーランドが12.3百万トンと前年度（13.1百万トン）と比べ6.3%減となる見込み（図2）。

EUでは、主に冬小麦が栽培されているが、フランス、ドイツ等の欧州北西部では、2023年秋の降雨による冬小麦の作付面積の減少や、作付け以降の降雨過多と日照不足により小麦生産量は大きく減少する見込み（図3）。

図1 EUの小麦生産量の推移

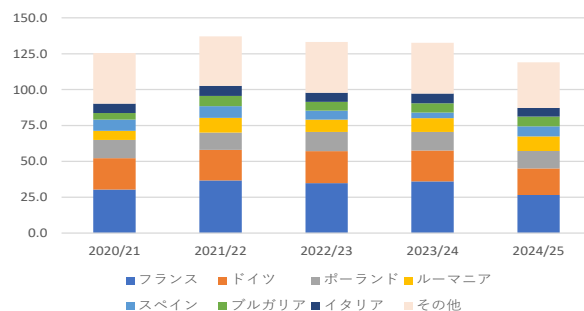
（単位：百万トン）



出典：EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2024.12.19) をもとに農林水産省で作成

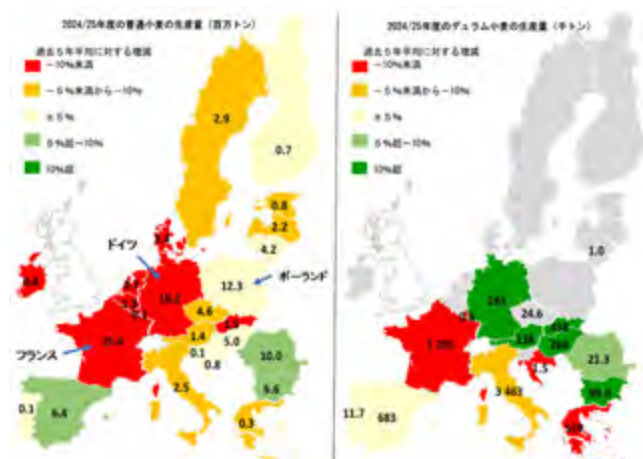
図2 EUにおける国別の小麦生産量の推移

（単位：百万トン）



出典：EC「EU cereals production (usable), area and yield」(2024.12.19) をもとに農林水産省で作成

図3 2024/25年度の小麦生産量と過去5年平均との比較



出典：EC「Cereals market situation」(2024.12.19) より

2 小麦の輸入動向

(1) 2023/24 年度の輸入動向

EC によれば、2023/24 年度の小麦の輸入量は 12.1 百万トンと、飼料用小麦の輸入増加を受け前年度（11.7 百万トン）と比べ 3.5% 増となっている（図 4）。

輸入国別には、スペインが 560.1 万トンと 46.2% を占め、次いでイタリアが 339.2 万トンで 28.0%、ギリシャが 68.4 万トンで 5.6% と続いている（表 1）。

輸入先国別には、ウクライナが 648.7 万トンと 53.6% を占め、次いでカナダが 138.5 万トンで 11.4%、ロシアが 82.1 万トンで 6.8% と続いている（表 2）。

2022/23 年度以降、特にスペインの輸入が急増しており、また、輸入先国ではウクライナからの輸入が急増している。スペインでは、小麦の生産量が 2021/22 年度は豊作で 8.2 百万トンとなったものの、2022/23 年度及び 2023/24 年度は干ばつによりそれぞれ 6.2 百万トン、3.9 百万トンと生産量が大きく減少したことから輸入が急増したと考えられる。なお、USDA「Grain Production Decline to Test Supply Chain Logistics Resilience in Spain」（2023.6.1）によれば、スペインの穀物消費量の 75% を飼料用が占めており、輸入した小麦の大部分は飼料用に消費されていると考えられる。

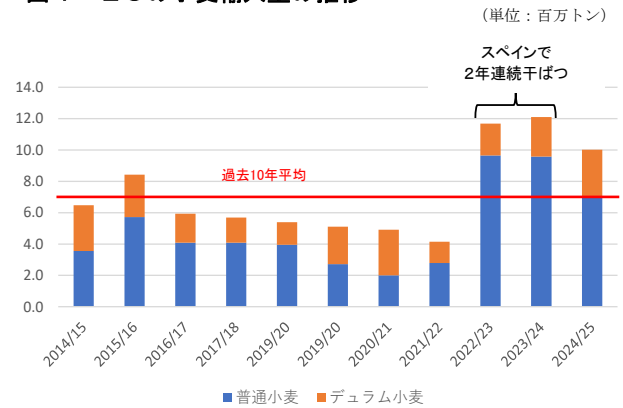
また、ウクライナからの輸入の急増は、ロシアのウクライナ侵攻により、大型船舶による遠距離輸送が困難となりアジア向けなどから EU への輸出のシフトが起こったためと考えられる。輸入増の大部分をスペインが占めており、スペインが輸入する小麦のうち、ウクライナのシェアは、2022/23 年度は 47.1%、2023/24 年度は 76.1% となっている。

(2) 2024/25 年度の輸入動向

EC によれば、2024/25 年度の小麦の輸入量は 10.0 百万トンと、ウクライナの供給量が減少し、同国からの輸入が減少すること等から前年度（12.1 百万トン）と比べ 17.2% 減となる見込み（図 4）。

2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～10 月の輸入量は 369.3 万トンで、輸入国別には、スペインが 174.7 万トンと 47.3% を占め、次いでイタリアが 85.3 万トンで 23.1%、ルーマニアが

図 4 EU の小麦輸入量の推移



出典：EC「EU trade for cereals」及び「EU Cereals Balance Sheets」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

表 1 EU の小麦の輸入国別数量

(単位：万トン)

2020/21年度		2021/22年度		2022/23年度		2023/24年度		2024/25年度 (2024年7月～10月)	
国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
イタリア	288.2	イタリア	182.1	スペイン	411.3	スペイン	560.1	スペイン	174.7
スペイン	62.8	スペイン	52.4	イタリア	271.8	イタリア	339.2	イタリア	85.3
ベルギー	30.5	アイルランド	43.3	ルーマニア	98.7	ギリシャ	68.4	ルーマニア	20.7
ギリシャ	30.4	ギリシャ	38.4	ポーランド	90.2	ルーマニア	56.1	アイルランド	20.1
アイルランド	27.5	スロベニア	37.1	ギリシャ	49.9	アイルランド	45.7	ポーランド	17.3
その他	53.2	その他	62.6	その他	247.2	その他	141.7	その他	51.1
合計	492.5	合計	415.9	合計	1,169.0	合計	1,211.2	合計	369.3

出典：EC「EU trade for cereals」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

表 2 EU の小麦の輸入先国別数量

(単位：万トン)

2020/21年度		2021/22年度		2022/23年度		2023/24年度		2024/25年度 (2024年7月～10月)	
国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量	国名	輸入量
カナダ	227.0	カナダ	79.0	ウクライナ	617.4	ウクライナ	648.7	ウクライナ	219.9
米国	65.6	英国	76.9	カナダ	189.0	カナダ	138.5	カナダ	42.1
ウクライナ	62.8	ロシア	54.5	英国	176.5	ロシア	82.1	モルドバ	28.2
英国	33.9	セルビア	43.5	ロシア	36.4	トルコ	76.8	米国	25.7
ロシア	31.3	ウクライナ	35.4	米国	36.1	モルドバ	73.6	トルコ	18.2
その他	71.8	その他	126.6	その他	113.5	その他	191.5	その他	35.3
合計	492.5	合計	415.9	合計	1,169.0	合計	1,211.2	合計	369.3

出典：EC「EU trade for cereals」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

20.7 万トンで 5.6%と続いている（表 1）。

同期間の輸入先国別には、ウクライナが 219.9 万トンと 59.5%を占め、次いでカナダ 42.1 万トンで 11.4%、モルドバが 28.2 万トンで 7.6%と続いている（表 2）。

2024/25 年度のスペインの小麦生産量は 7.1 百万トンと、干ばつであった前年度 3.9 百万トンから回復した。また、ウクライナからの小麦輸出は、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊による海上輸送が安定しており、2024/25 年度は遠距離の輸送が必要な東南アジア向けなどが増加したものの、スペインが 2024/25 年度（2024 年 7 月～10 月）に輸入した小麦のうちウクライナのシェアは 69.3%と、引き続き多くの小麦がウクライナから輸入されており、価格面からウクライナ産小麦の需要が高いものとみられる。

3 小麦の輸出動向

(1) 2023/24 年度の輸出動向

EC によれば、2023/24 年度の小麦の輸出量は 36.4 百万トンと、増産等を受け、前年度（33.6 百万トン）と比べ 8.4%増（図 5）。

輸出国別には、フランスが 1,052.6 万トンと 28.9%を占め、次いでルーマニアが 671.6 万トンで 18.5%、ポーランドが 470.2 万トンで 12.9%と続いている（表 3）。

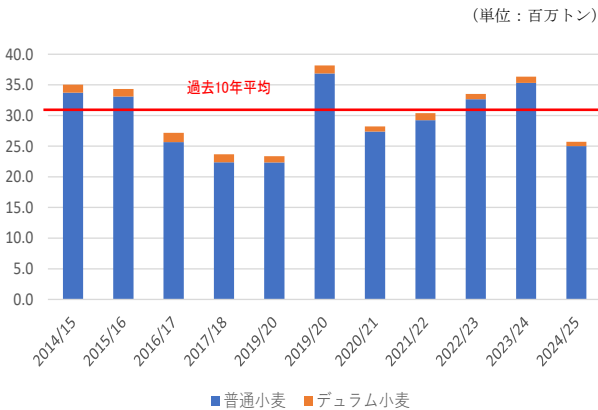
輸出先国別には、モロッコが 489.1 万トンと 13.4%を占め、次いでアルジェリアが 393.7 万トンで 10.8%、ナイジェリアが 348.9 万トンで 9.6%と続いている（表 4）。

(2) 2024/25 年度の輸出動向

EC によれば、2024/25 年度の小麦の輸出量は 25.7 百万トンと、生産量の減少等を受け前年度（36.4 百万トン）と比べ 29.3%減となる見込み（図 5）。

2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～10 月の輸出量は 995.5 万トンと、前年度同期（1,231.6 万トン）と比べ 19.2%減となっており、生産量の減少のほか、ロシアやウクライナなど他の輸出国との競合の影響もあるものと思われる。現地情報会社によれば、ロシアは、前年度の 2023/24 年度において史上最高となる 5,416 万トンの小麦を輸出した中で、2024/25 年度前半（2024 年 7 月～12 月）では 2,854 万トンと前年度同期（2,716 万トン）を 5.1%上回った。これは 2024/25 年度のロシアの小麦の不作を受け、年度後半の小麦の輸出枠が少なくなると予想されたことやルーブル安の傾向から輸出関税率が上昇

図 5 EUの小麦輸出量の推移



出典：EC「EU trade for cereals」及び「EU Cereals Balance Sheets」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

表 3 EUの小麦の輸出国別数量

(単位: 万トン)									
2020/21年度		2021/22年度		2022/23年度		2023/24年度		2024/25年度 (2024年7月～10月)	
国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
フランス	777.1	フランス	902.7	フランス	1,040.3	フランス	1,052.6	ルーマニア	248.0
ドイツ	450.5	ルーマニア	673.8	ルーマニア	516.6	ルーマニア	671.6	ブルガリア	183.3
ポーランド	322.4	ドイツ	416.0	ドイツ	440.4	ポーランド	470.2	フランス	113.4
ウクライナ	316.1	ブルガリア	337.1	ポーランド	385.8	ブルガリア	401.8	ウクライナ	111.3
ルーマニア	315.9	ウクライナ	168.2	ブルガリア	301.6	ドイツ	389.2	ラトビア	100.6
その他	640.5	その他	543.0	その他	670.2	その他	654.2	その他	238.8
合計	2,822.5	合計	3,040.9	合計	3,355.0	合計	3,639.6	合計	995.5

出典：EC「EU trade for cereals」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

表 4 EUの小麦の輸出先国別数量

(単位: 万トン)									
2020/21年度		2021/22年度		2022/23年度		2023/24年度		2024/25年度 (2024年7月～10月)	
国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
アルジェリア	594.1	アルジェリア	535.7	モロッコ	468.8	モロッコ	489.1	ナイジェリア	123.2
ナイジェリア	229.2	エジプト	280.8	アルジェリア	428.6	アルジェリア	393.7	アルジェリア	108.7
モロッコ	227.8	ナイジェリア	228.2	ナイジェリア	294.9	ナイジェリア	348.9	エジプト	99.3
サウジアラビア	188.4	中国	221.7	サウジアラビア	196.3	中国	237.7	モロッコ	68.2
中国	177.5	モロッコ	215.8	エジプト	181.9	エジプト	178.5	英国	63.1
その他	1,405.5	その他	1,558.7	その他	1,784.4	その他	1,991.8	その他	533.0
合計	2,822.5	合計	3,040.9	合計	3,355.0	合計	3,639.6	合計	995.5

出典：EC「EU trade for cereals」（2024.12.19）をもとに農林水産省で作成

すると予想されたことなどから、年度前半の輸出量が増加したものと思われる。

2024/25 年度前半のロシアの小麦輸出先国上位には EU の主要な輸出先国であるエジプト、アルジェリア、ナイジェリア及びモロッコが含まれており、いずれの国もロシアの輸出量が前年度同期と比べ増加している。これは、EU に比べ価格競争力が高いことが要因とみられるが、生産者や輸出業者が十分な利益を確保できる価格では輸出されていないとの報道もある。

また、ウクライナの輸出については、2024/25 年度前半（2024 年 7 月～12 月）では 987 万トンと前年度同期（763 万トン）を 29.4% 上回った。これは 2023 年 7 月にロシアが黒海穀物イニシアティブからの離脱を表明し輸出が一時停止した影響もあるものの、2024/25 年度の収穫開始が乾燥の影響により平年に比べ早かったことや 2023 年 8 月以降運用が開始されルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する臨時回廊による輸出が安定的に推移したことなどから、年度前半の輸出量が増加したものと思われる。2024/25 年度前半のウクライナの小麦輸出先国上位には EU の主要な輸出先国であるエジプト及びアルジェリアのほか、近年 EU からの輸入が増加しているインドネシアが含まれており、いずれの国もウクライナの輸出量が前年度同期と比べ増加している（表 5）。

2024/25 年度のうち 2024 年 7 月～10 月の EU 輸出量を輸出国別にみると、ルーマニアが 248.0 万トンと 24.9% を占め、次いでブルガリア 183.3 万トンで 18.4%、フランス 113.4 万トンで 11.4% と続いている（表 3）。フランスは、昨年度まで EU において輸出量第 1 位であったが、2024/25 年度の生産量が前年度に比べ 26.5% 減となること等により輸出シェアを大きく減らしている。同期間の輸出先国別には、ナイジェリアが 123.2 万トンと 12.4% を占め、次いでアルジェリア 108.7 万トンで 10.9%、エジプト 99.3 万トンで 10.0% と続いており、引き続き、北アフリカや西アフリカへの輸出が主となっているが、EU における生産量の減少とロシアやウクライナなど他の輸出国との競合により、今後も輸出先国や輸出先のシェアが変動するとみられる（表 4）。

4 今後の見通し

2024/25 年度の小麦の生産量は 119.1 百万トンと前年度と比べ 10.2% 減となり 2012/13 年度以来の低水準となると見込まれている。

そのような中で 2024/25 年度の小麦の輸入量は、ウクライナの供給量が減少し同国からの輸入が減少すること等から 10.0 百万トンと前年度と比べ 17.2% 減となる見込み。ウクライナからの輸入は減少するものの、ウクライナ産小麦の価格競争力の高さから、引き続き、同国

表 5 ロシア及びウクライナの小麦の輸出先国別数量

単位: 万トン

ロシア				ウクライナ			
2023/24年度 (2023年7月～12月)		2024/25年度 (2024年7月～12月)		2023/24年度 (2023年7月～12月)		2024/25年度 (2024年7月～12月)	
国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量	国名	輸出量
トルコ	394	エジプト	528	スペイン	259	スペイン	236
エジプト	310	バングラデシュ	220	ルーマニア	99	インドネシア	155
バングラデシュ	209	トルコ	192	エジプト	61	ベトナム	82
アルジェリア	151	アルジェリア	166	インドネシア	55	エジプト	80
サウジアラビア	88	ケニア	132	イタリア	37	アルジェリア	75
ケニア	81	ナイジェリア	115	トルコ	37	タイ	64
イスラエル	75	サウジアラビア	100	ベトナム	29	バングラデシュ	47
リビア	65	イスラエル	94	パキスタン	27	チュニジア	45
ナイジェリア	34	モロッコ	90	レバノン	22	イタリア	40
モロッコ	29	リビア	90	ギリシャ	21	イエメン	30
その他	1,280	その他	1,129	その他	116	その他	135
合計	2,716	合計	2,854	合計	763	合計	987

出典：現地情報会社のデータをもとに農林水産省で作成

図 6 EUの小麦の主な輸出先国



からスペインの飼料用向け需要等での相当量の輸入が見込まれることから、EU の輸入量のうちウクライナからの輸入が大きなシェアを占めると見込まれる。一方で、ウクライナは臨時回廊による船舶での輸出が安定化してきており、ルーマニア等の EU 近隣諸国へのウクライナ産小麦の輸入は減少が見込まれる。

2024/25 年度の小麦の輸出については、EU における生産量の減少を受けて 25.7 百万トンと前年度と比べ 29.3%減となる見込み。世界全体でみれば EU の輸出減については、他の主要輸出国からの輸出によりカバーされるとみられる。

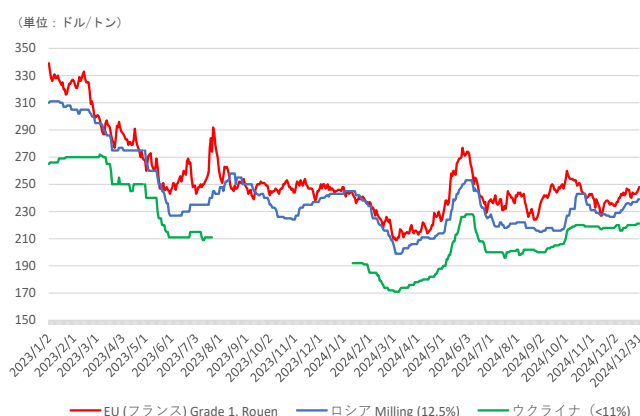
EU の主要な小麦であるフランス産小麦とロシア及びウクライナ産小麦の FOB 価格を比較すると、価格差が縮小してきているものの、ロシア及びウクライナ産小麦にまだ価格競争力がある。また、EU の主要な輸出先である北アフリカ、西アフリカ及び中東への輸出については、ロシア及びウクライナも地理的な優位性があることから、同地域で厳しい競争となっているとみられる。

しかしながら、ロシアでは 2024/25 年度後半（2025 年 2 月 15 日～6 月 30 日）の小麦及びメスリンの輸出枠を 10.6 百万トン（前年度 29 百万トン）とすることを発表している。USDA「Grain: World Markets and Trade」（2025.1.10）によれば、ロシアの 2024/25 年度後半の穀物輸出枠は、過去 5 年間で最小であり、当該輸出枠により 2 月以降のロシアの小麦輸出は減速すると見込まれ、ロシア産小麦の主要輸入国であるエジプト、トルコ、バングラデシュ、アルジェリア及びサウジアラビアは、小麦の供給をアルゼンチン、豪州及び EU など他の小麦輸出国に頼らざるを得ないとしている。また、ウクライナも 2024/25 年度の小麦の輸出上限を 16.2 百万トン（前年度輸出量 18.6 百万トン（USDA））に設定しているが、2024/25 年度前半（2024 年 7 月～12 月）で 9.9 百万トンと、すでに輸出上限に対し 60.9%を輸出している。

このことから、2024/25 年度後半についてはロシア及びウクライナからの小麦の輸出が鈍化するとみられ、供給可能量は限られているものの、今後 EU の輸出が上向く可能性もある。

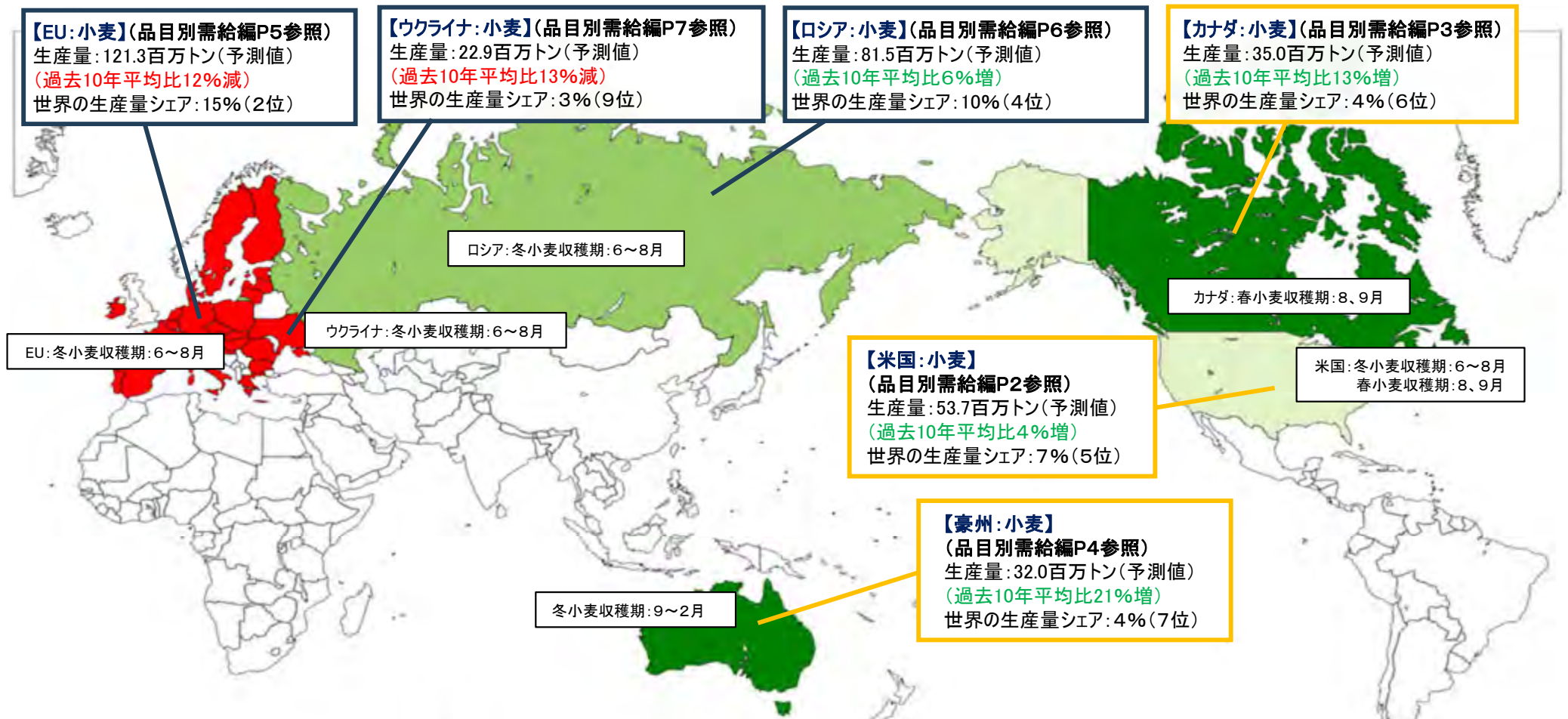
EU における翌年度 2025/26 年度の冬小麦の作付けはすでに終了しており、2024/25 年度のような作付時期の過剰な降雨はなく、現在のところ生育に大きな問題はない。一方でロシアの 2025/26 年度の冬小麦は、作付け時の乾燥により生育が遅れた状態で越冬を迎えており、枯死等による生産量の減少が懸念されている。我が国の小麦の主な輸入先は米国、カナダ、豪州であり、ロシアからは近年輸入を行っておらず、EU からの輸入も僅かではあるものの、ロシア及び EU は、近年、世界全体の輸出におけるシェアがそれぞれ第 1 位、2 位となっており、両国の生産動向等は世界的な小麦需給や相場に影響を与えることから、引き続き注視していきたい。

図7 小麦の FOB 価格の推移

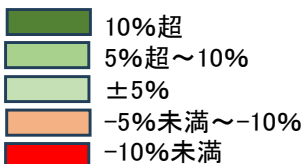


出典: IGC のデータをもとに農林水産省で作成

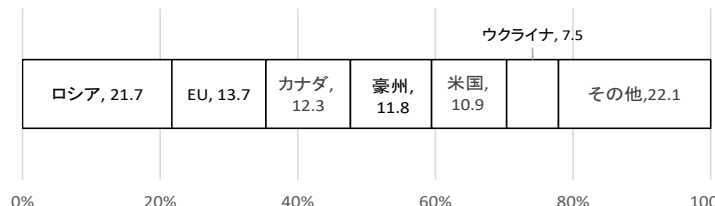
資料1-1 小麦の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(1月版)



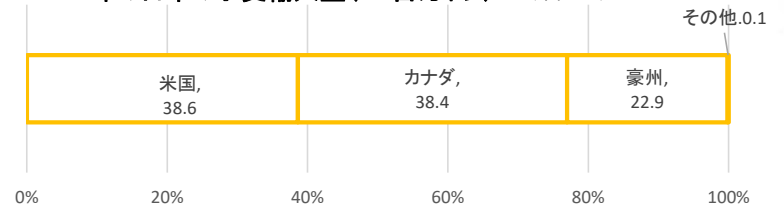
生産量増減



2024/25年度の世界の小麦輸出力(212.0百万トン) (単位: %)



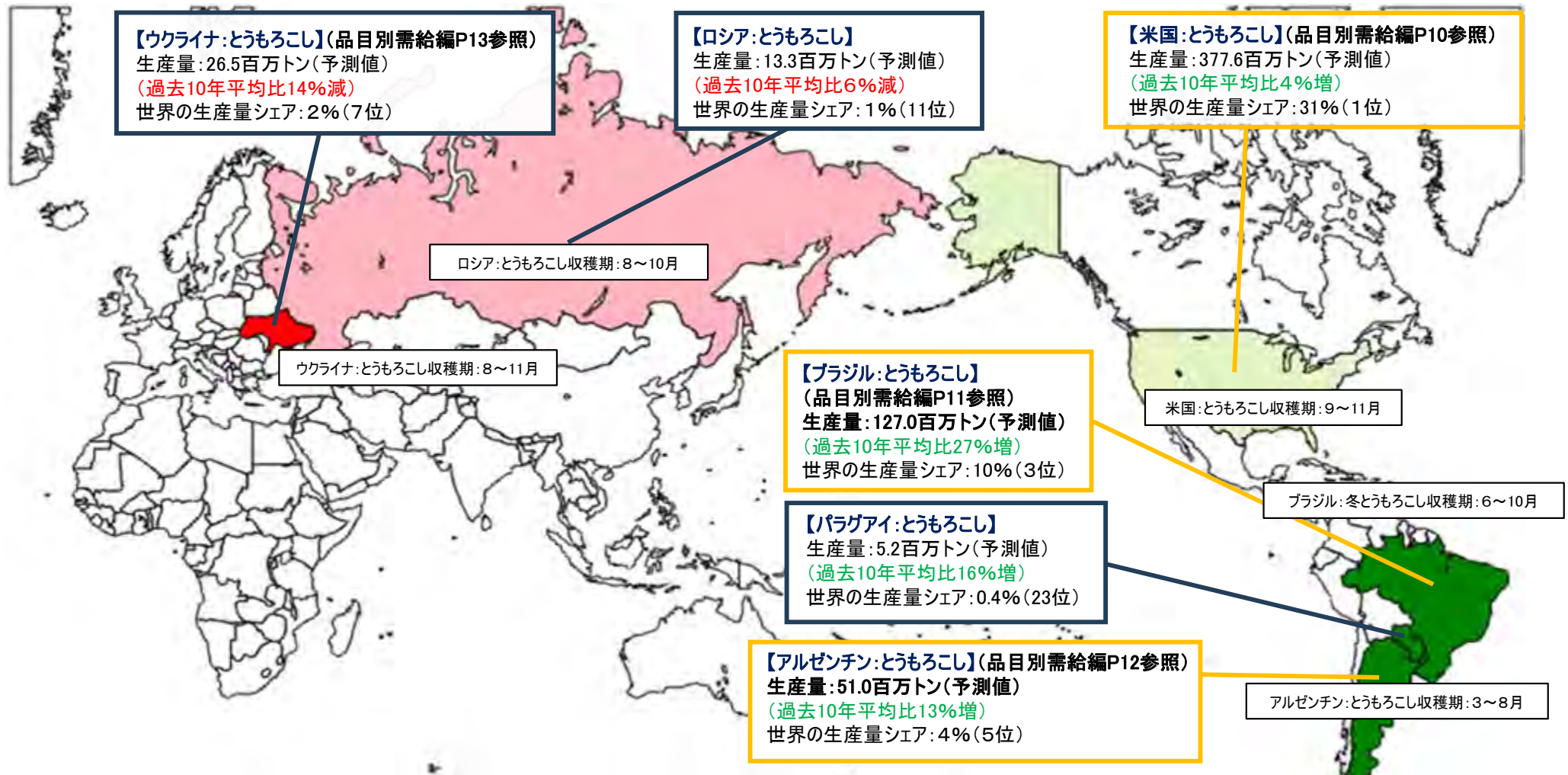
2023年の日本の小麦輸入量(5.0百万トン) (単位: %)



○ 2023年度の日本の小麦輸入量は510万トンであり、日本の小麦国内消費仕向量(631万トン、うち食用は494万トン)の80.9%を占める。

○ 輸入小麦の1人1日当たり供給熱量は238kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の10.8%を占める。

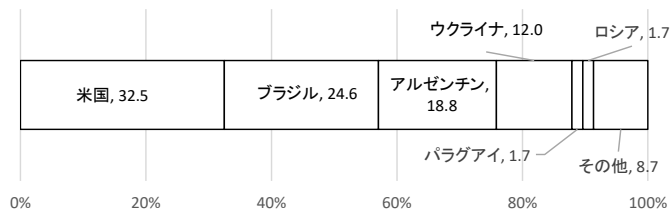
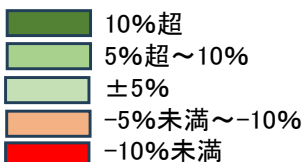
資料1-2 とうもろこしの主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(1月版)



2024/25年度の世界のとうもろこし輸出量(191.4百万トン) (単位:%)

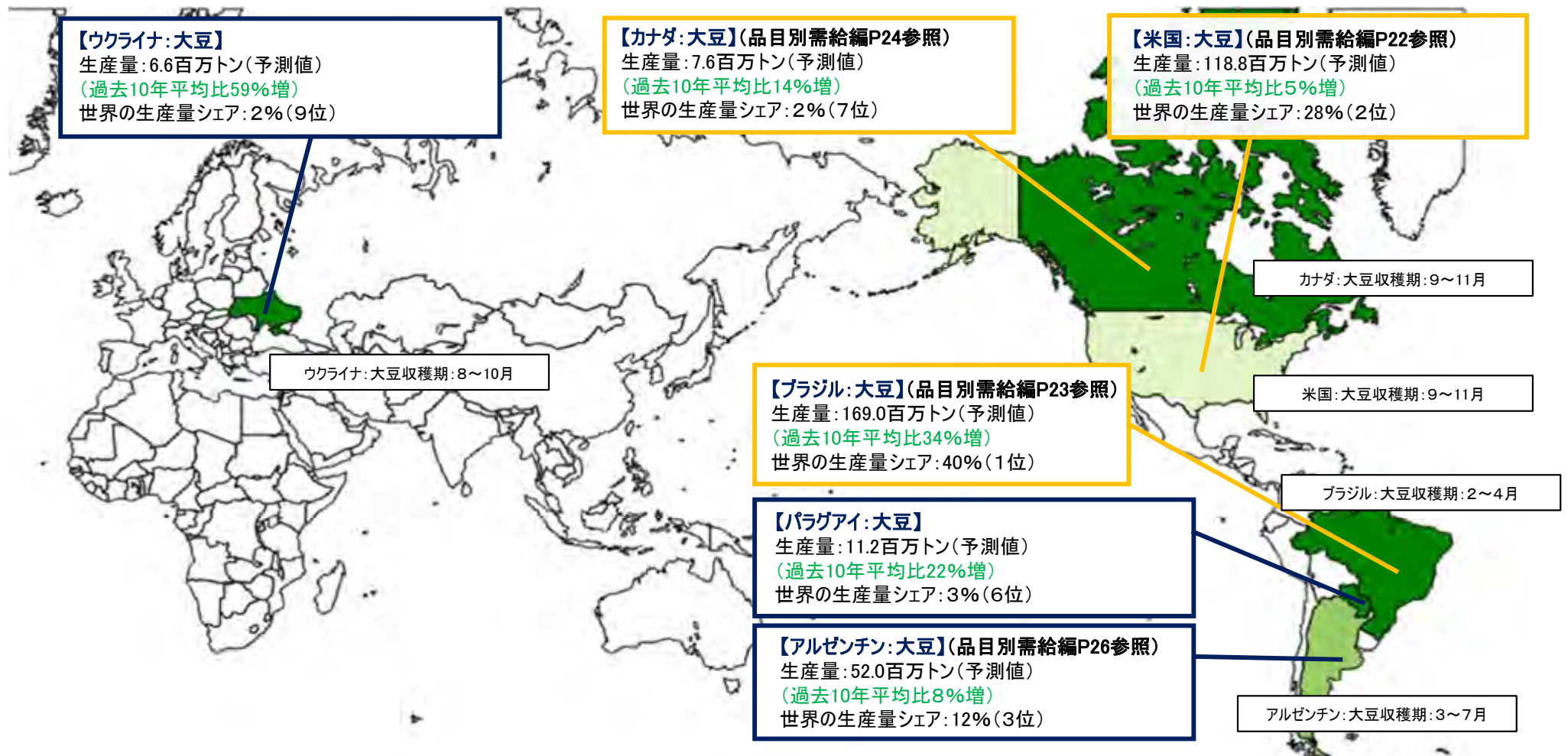
2023年の日本のとうもろこし輸入量(14.9百万トン) (単位:%)

生産量増減

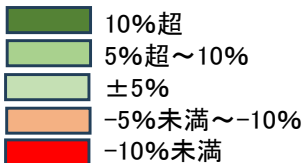


○ 2023年度の日本のとうもろこし輸入量は1,499万トンと、日本のとうもろこし国内消費仕向量(1,486万トン、うち飼料用は1,159万トン)のほぼ全量を占める。

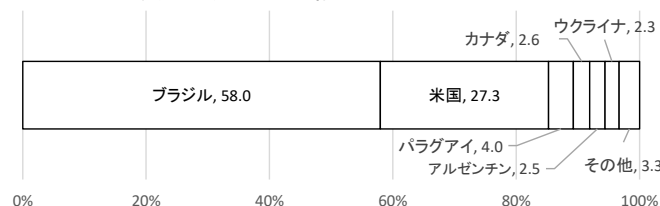
資料1-3 大豆の主要輸出国の生産量(過去10年平均との増減比較) 2024/25年度(1月版)



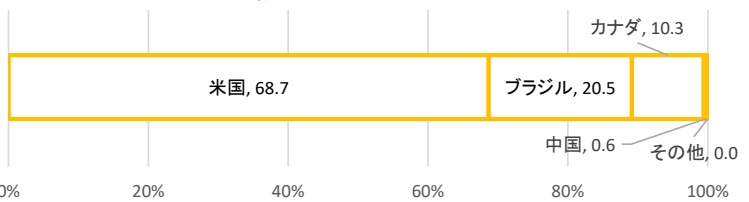
生産量増減



2024/25年度の世界の大豆輸出力(182.0百万トン) (単位:%)



2023年の日本の大豆輸入量(3.16百万トン) (単位:%)

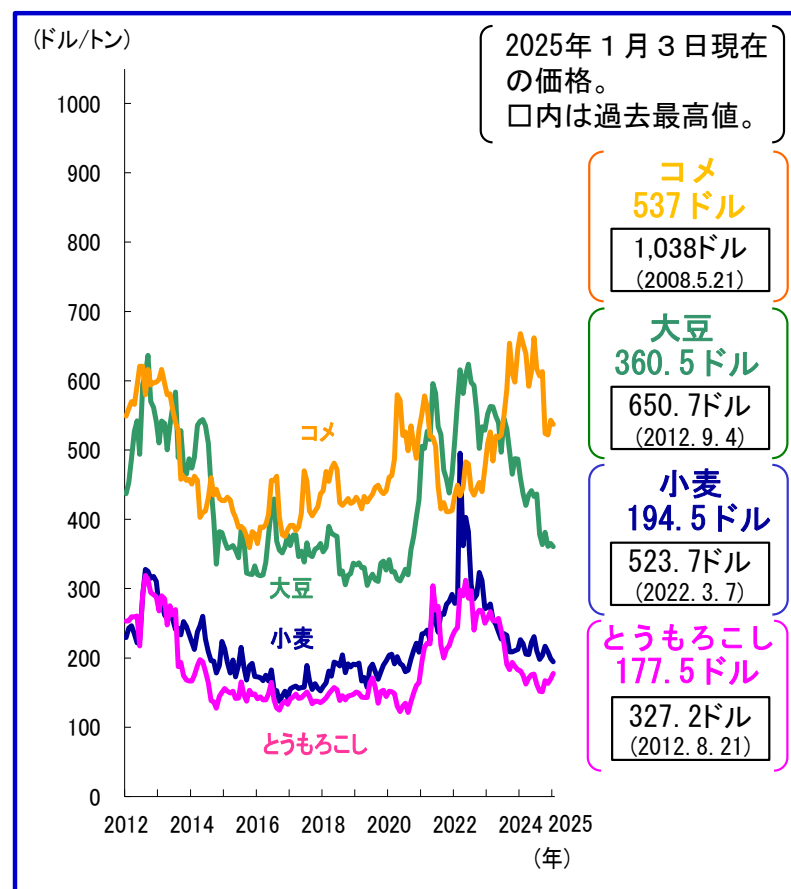
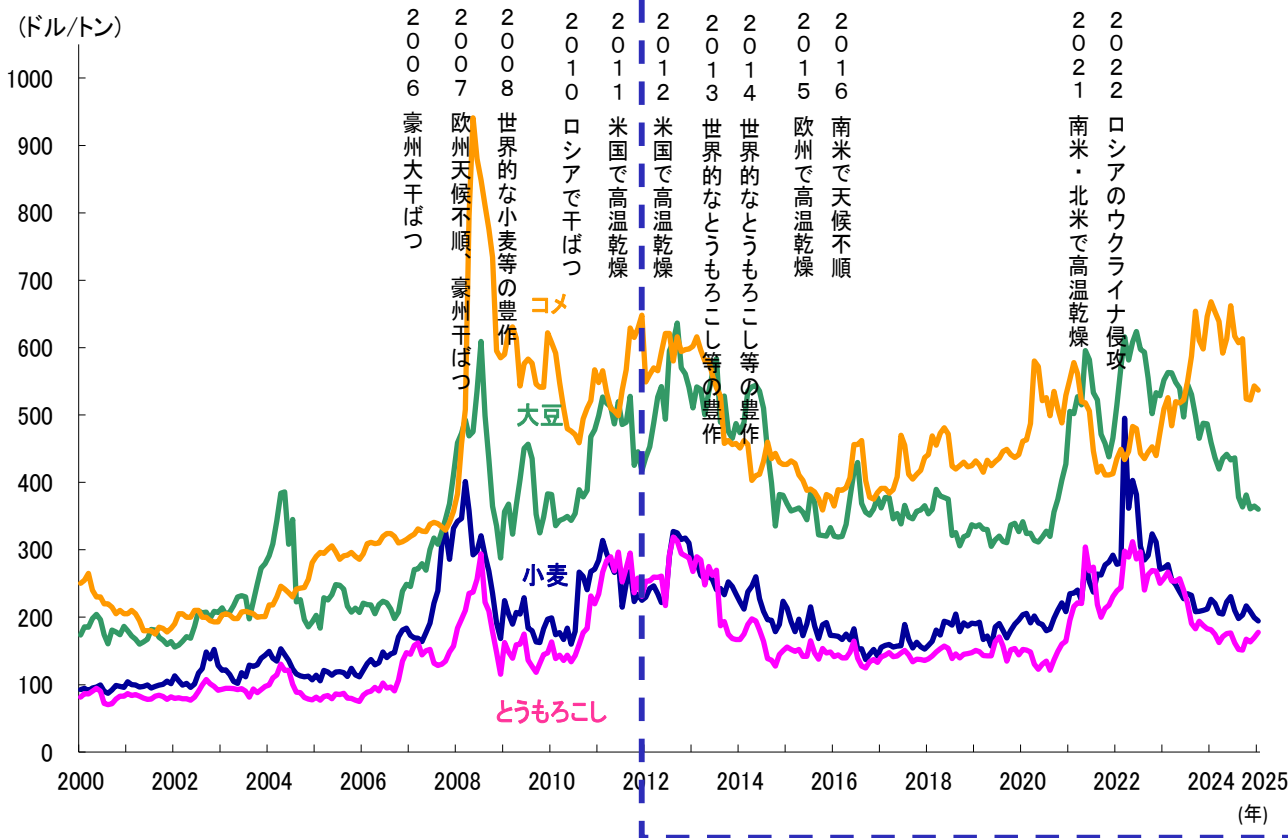


- 2023年度の日本の大豆輸入量は307万トンであり、日本の大豆国内消費仕向量(356万トン、うち大豆油などの加工用は255万トン、食用は87万トン)の86.2%を占める。
- 輸入大豆の1人1日当たり供給熱量は55kcalと、1人1日当たり総供給熱量(2,203kcal)の2.5%を占める。

資料 1—4 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2022年9月以降、インドの輸出規制強化、インドネシアの需要増等から上昇も、インドの一部輸出規制解除等を受け低下。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向



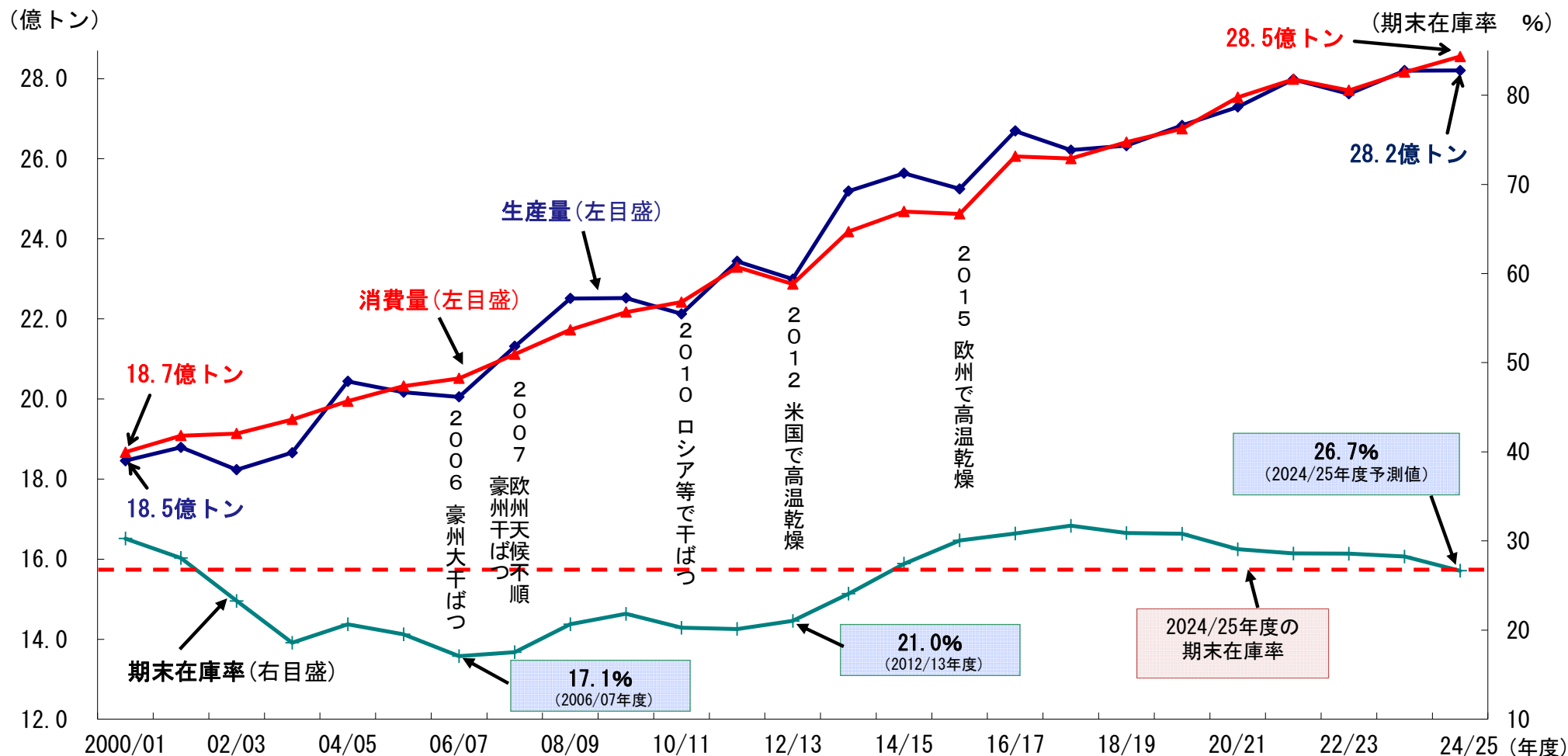
注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
なお、コメは2024年12月18日の価格。

注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、26.7%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

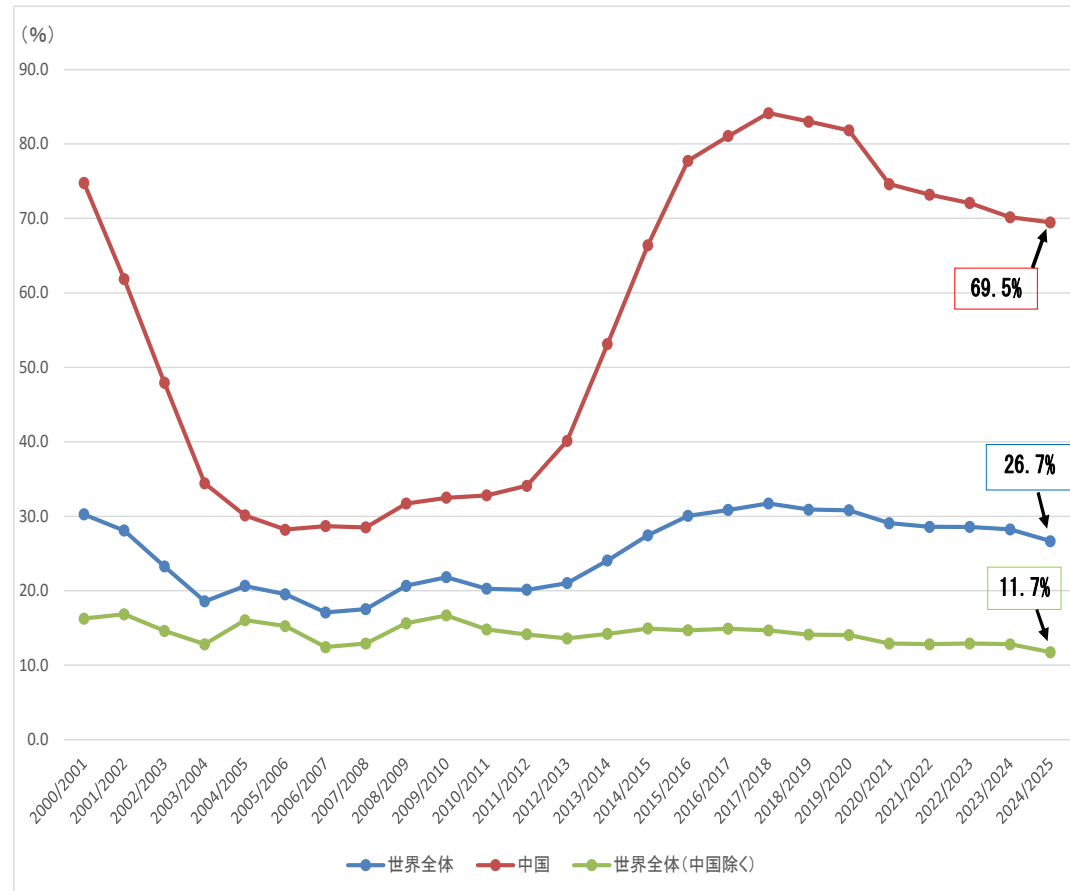


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(January 2025)、「PS&D」

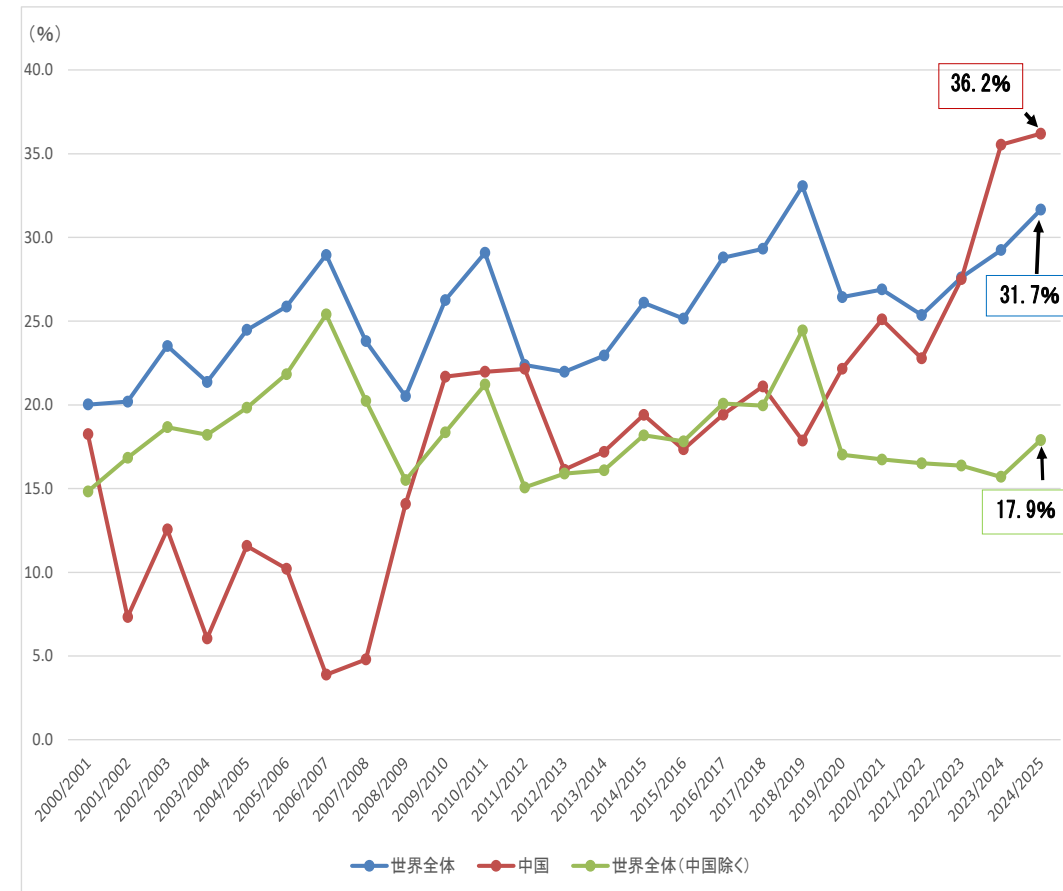
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 10, 2025)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

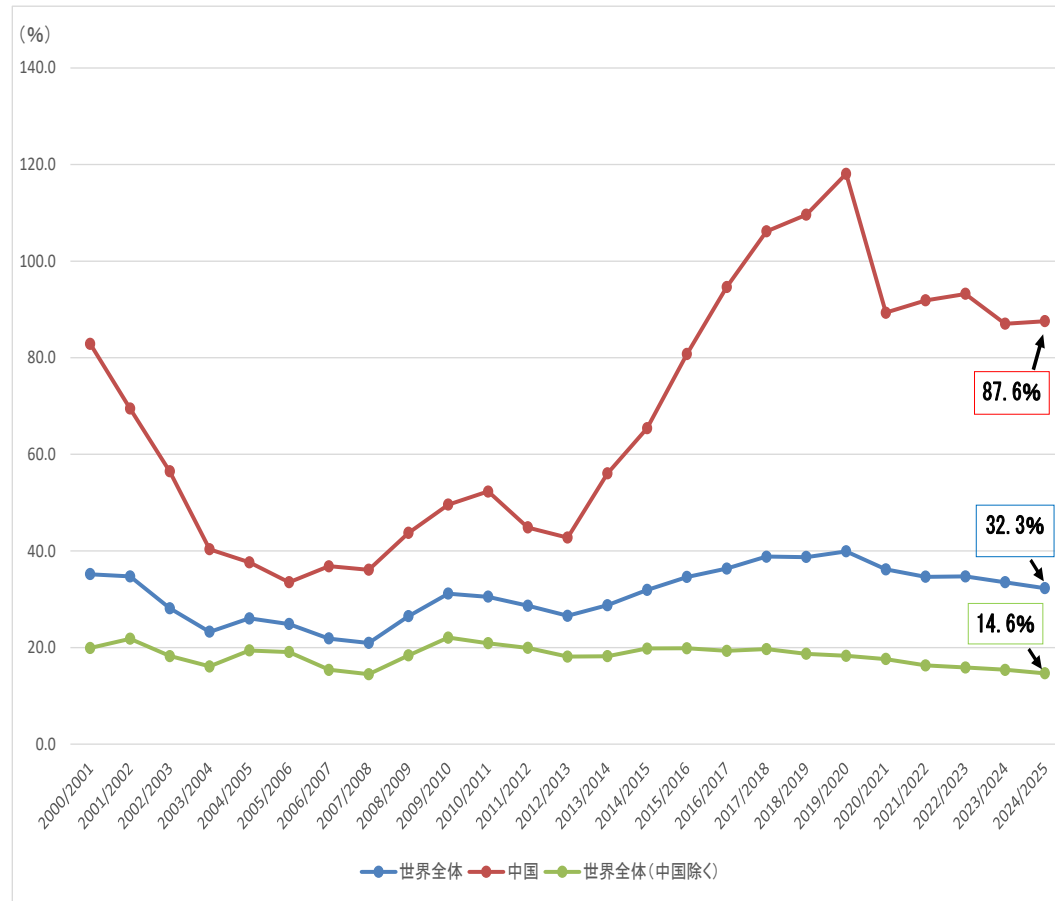
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

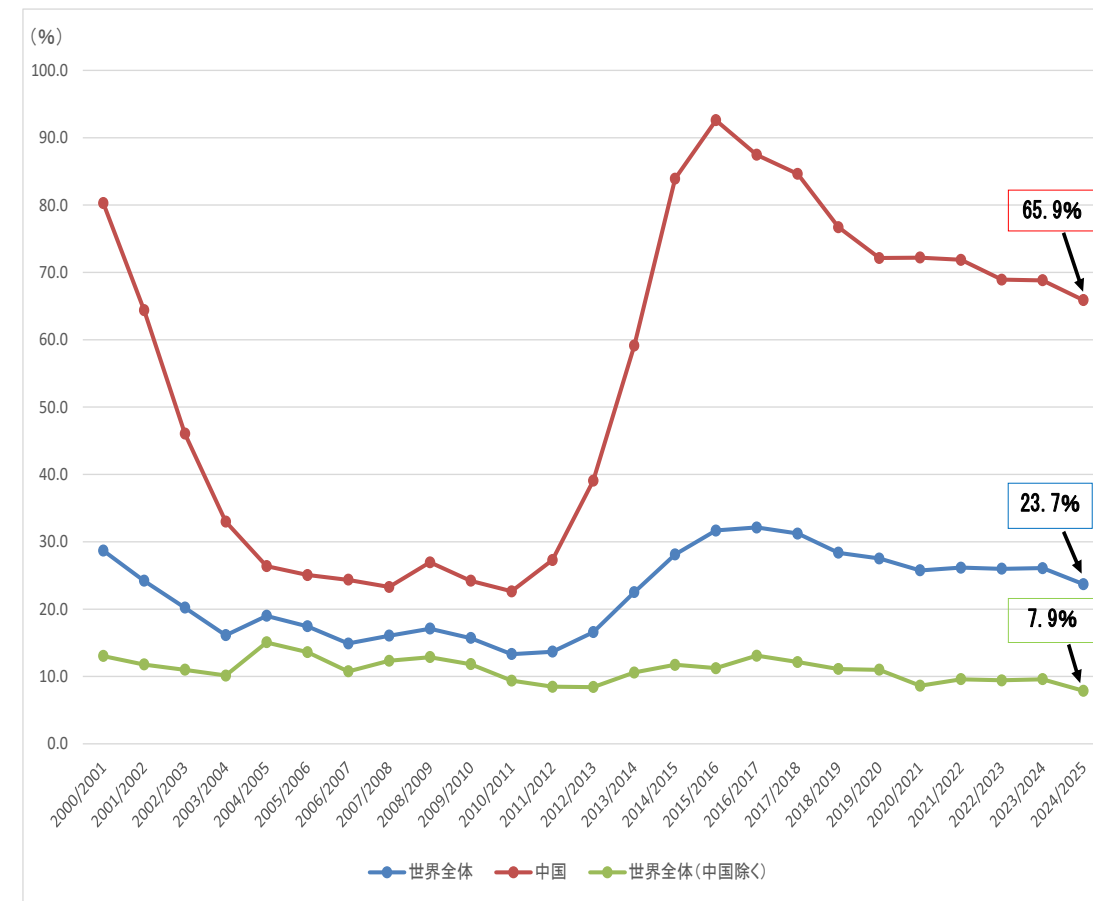
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(January 10, 2025)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

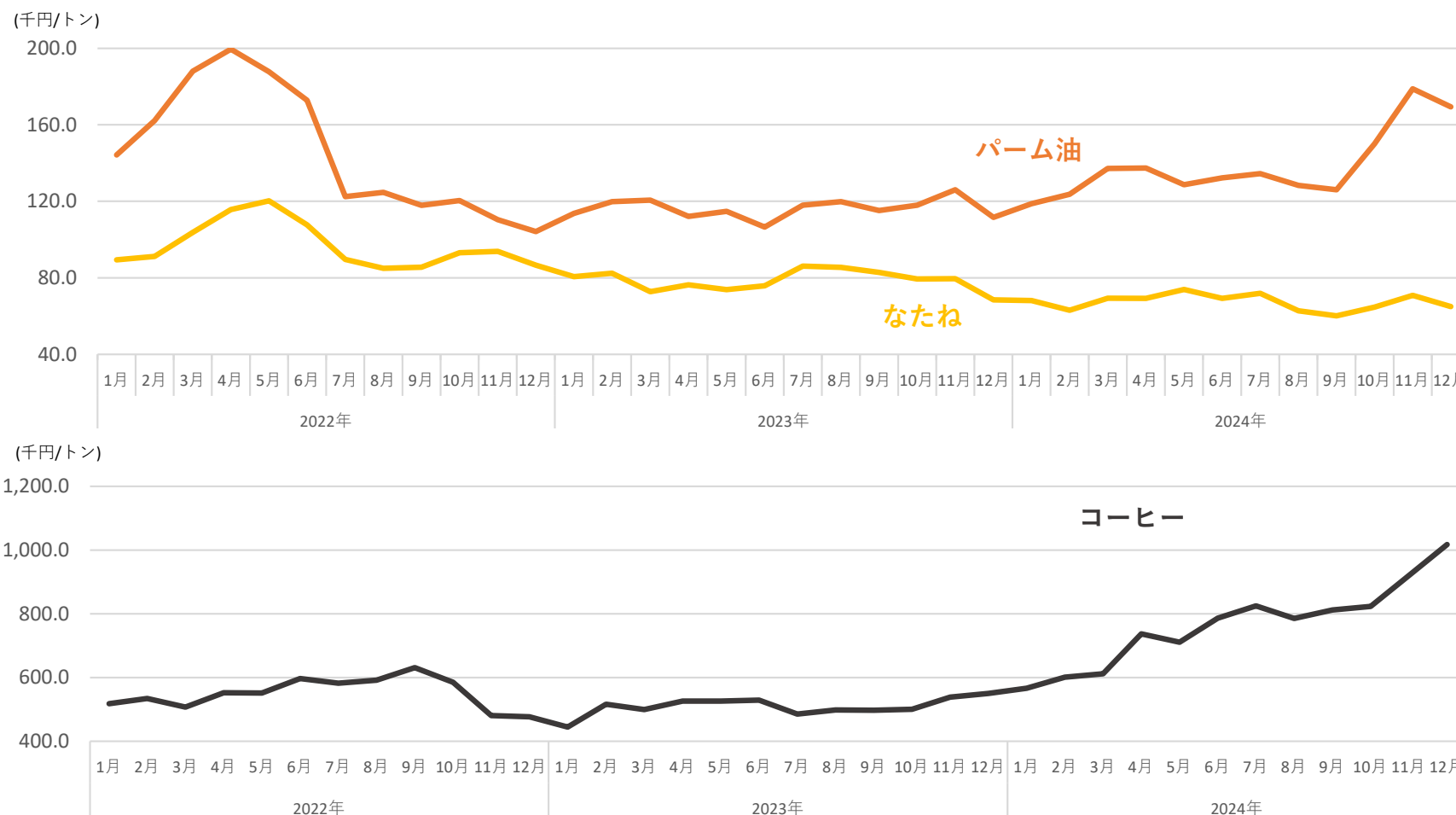
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- パーム油の市場価格については、**2022年**にインドネシアの輸出禁止措置により上昇したものの解除後（**2022年5月**）は下落し、安定していたが、インドネシアのバイオ燃料政策等の影響で**2024年10月**以降上昇している。
- 菜種の市場価格については、**2021年**に主産地のカナダの不作により上昇したものの、**2022年**以降は収量の回復等により安定している。
- コーヒーについて、**2021年**以降、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、**2024年**以降は再び市場価格が高騰している。



2025年1月22日現在
□内は2022年1月以降
の最高値。

パーム油
178.8千円/トン

199.5千円/トン
(2022.4)

菜種
70.8千円/トン

120.3千円/トン
(2022.5)

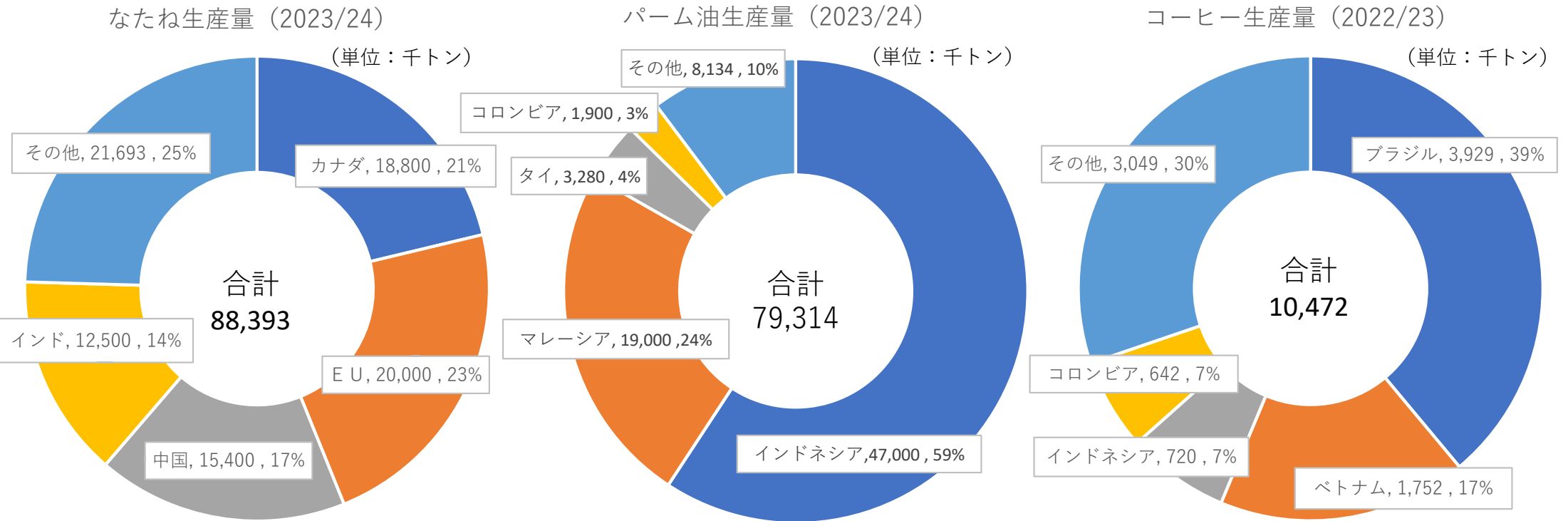
コーヒー
1017.3千円/トン

1017.3千円/トン
(2025.1)

※ 菜種の国際価格についてはカナダウィネベグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2024年 6 月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%	マレーシア	574	85.6%	ブラジル	124	35.0%
オーストラリア	983	48.6%	インドネシア	96	14.4%	ベトナム	99	27.9%
その他	0	0.0%	その他	0	0.1%	コロンビア	34	9.6%
合計	2.022	100.0%	合計	671	100.0%	その他	98	27.6%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8	60.2	64.8	70.8	65.1
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3	126.1	107.7	109.3	91.9
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5	812.1	81.5	89.0	94.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3	126.1	150.1	178.8	169.4
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4	98.2	119.1	119.1	94.7
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1	109.5	127.3	141.8	151.8

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ

注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5	812.1	823.4	920.3	1017.3
前月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2	103.4	101.4	111.8	110.5
前年 同月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7	163.3	164.6	170.9	184.9

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年12月の国内の加工食品の消費者物価指数は114.0～153.1（前年同月比で-2.4%～4.4%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省）
（令和6年7月～令和6年12月）

【参考】
食品価格動向調査（農林水産省）
（令和6年7月～令和7年1月）

	R2	R3	R4	R5	R6						
品目	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	上昇率 (前年同月比)
食パン	100.0	99.2	110.3	118.7	122.4	122.6	122.3	121.6	121.5	121.9	-0.6%
即席めん	100.0	100.1	107.6	119.7	122.9	124.3	120.2	118.4	122.0	120.1	-1.7%
豆腐	100.0	101.3	105.3	114.6	118.1	117.9	118.8	119.3	119.7	119.1	1.6%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	106.9	144.4	160.2	146.8	148.1	144.3	146.9	149.8	149.9	-2.2%
みそ	100.0	99.3	101.3	108.1	113.4	113.7	114.8	115.3	114.4	114.0	2.7%
マヨネーズ	100.0	105.6	125.6	149.5	152.7	151.8	153.3	152.7	153.1	153.1	-1.0%
チーズ	100.0	98.7	107.5	131.1	132.3	135.4	133.4	134.6	133.4	128.2	-2.4%
バター	100.0	99.9	99.2	108.6	119.6	120.1	120.0	120.1	120.1	119.5	3.5%
生鮮食品を 除く食料	100.0	100.2	104.1	112.6	116.3	117.1	117.8	119.2	119.9	120.1	4.4%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。
資料: 総務省消費者物価指数

	R2	R3	R4	R5	R6						R7		
品目	平均	平均	平均	平均	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	上昇率 (前月比)	上昇率 (前年同月比)
食パン	100.0	98.6	107.8	114.5	118.2	118.6	118.9	118.2	117.4	118.2	122.5	3.6%	4.2%
即席めん	100.0	99.2	105.6	117.5	121.0	120.4	119.1	115.5	118.5	117.3	115.5	-1.5%	-3.6%
豆腐	100.0	100.6	103.7	113.0	115.9	115.9	116.7	118.5	119.3	118.0	118.5	0.4%	3.4%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	104.1	140.7	159.4	142.9	145.1	143.5	144.5	142.9	140.0	140.3	0.2%	-8.5%
みそ	100.0	99.2	100.1	105.9	110.0	109.8	110.2	110.0	110.6	108.8	109.8	0.9%	-0.4%
マヨネーズ	100.0	102.2	117.7	139.8	140.3	140.6	141.3	140.6	138.6	140.6	140.6	0.0%	-2.4%
チーズ	100.0	98.1	105.7	126.5	129.3	129.3	128.8	128.8	128.3	122.3	127.8	4.5%	1.6%
バター	100.0	99.8	99.1	108.0	119.7	119.7	118.8	119.4	119.7	119.2	120.1	0.8%	1.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。
注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。
注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2025年2月号（1月24日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）メキシコの生体牛輸入停止などで、25年の牛肉生産量は下方修正

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003571.html

（豪州）24年の牛肉輸出量は過去最高の見通し、さらなる海外需要創出を模索

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003572.html

（ブラジル）24年の牛肉生産量、輸出量ともに前年を大幅に上回り推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003573.html

◆豚肉

（米国）24年11月の豚肉卸売価格、牛肉の代替需要などから前年同月比11.6%高

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003574.html

（メキシコ）24年の豚肉生産量は前年比2.1%増、25年は同1.6%増の予測

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003575.html

（EU）豚枝肉卸売価格、2カ月連続で200ユーロを下回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003576.html

（中国）豚肉供給量の増加から豚肉価格は下落傾向で推移

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003577.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）24年10月の生乳出荷量、前年同月をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003579.html

（豪州）11月の生乳生産量は前年同月並みも主要乳製品の輸出は好調

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003580.html

（NZ）24/25年度の生産者支払乳価を引き上げ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003581.html

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）消費量の微増などから期末在庫はかなりの程度減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003583.html

（世界：大豆）大豆の生産量、消費量ともに上方修正、期末在庫は引き続き大幅増の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003584.html

（米国）総消費量の増加により期末在庫はわずかに減少

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003585.html

（ブラジル）2024/25年度第1期作トウモロコシ、大豆の生育状況はおおむね良好

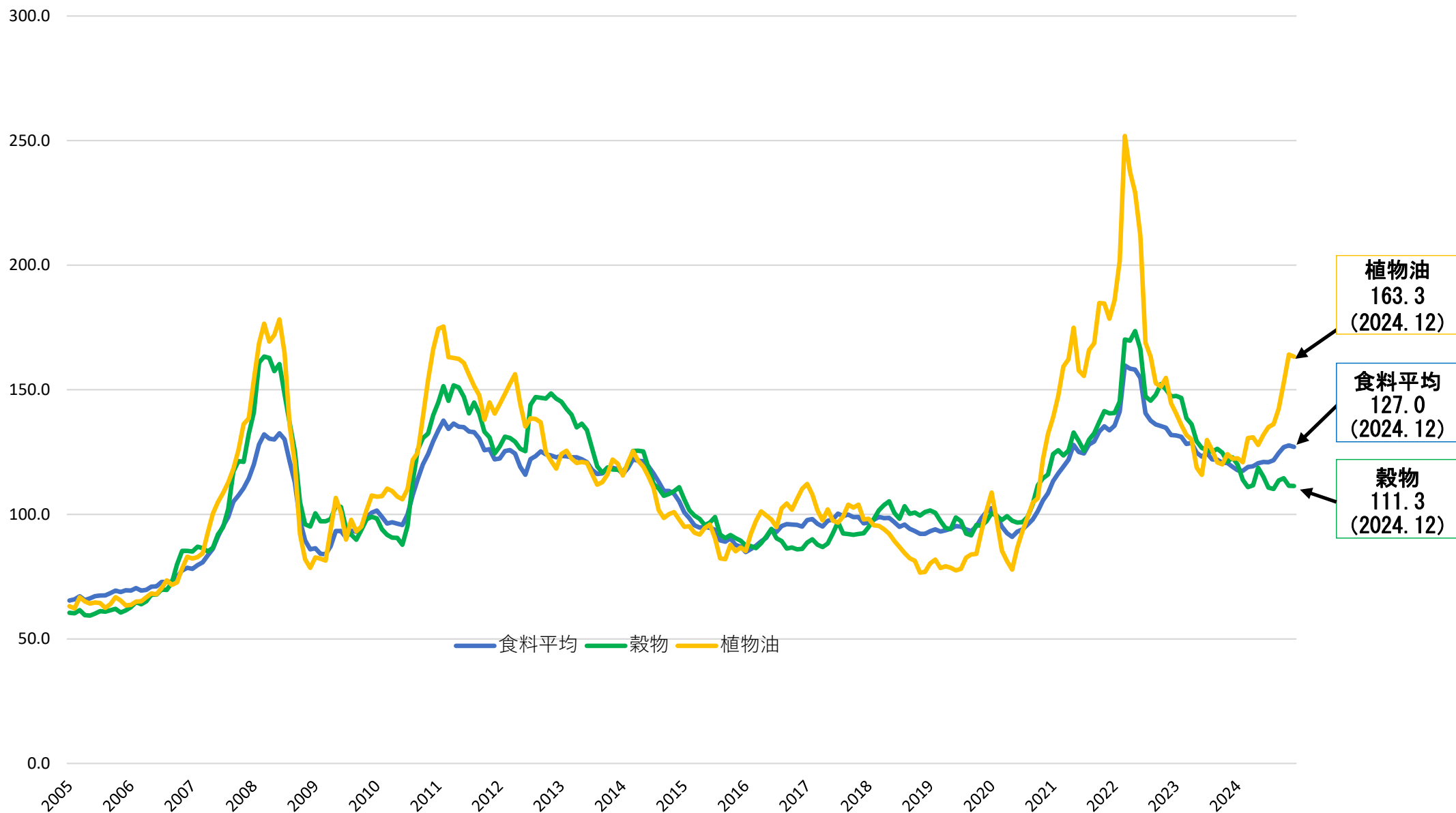
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003586.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003587.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.12)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

タイのコメ貿易について

1 はじめに

タイは、「世界の台所」(Kitchen of the World)と呼ばれるほど、豊富な農産物・水産物を生産し、世界中に輸出しています。今回は、タイの人々の主食であるコメに焦点を当て、タイのコメ輸出の動向やタイへの日本産米輸出に向けた可能性について報告します。

2 タイのコメ輸出の動向

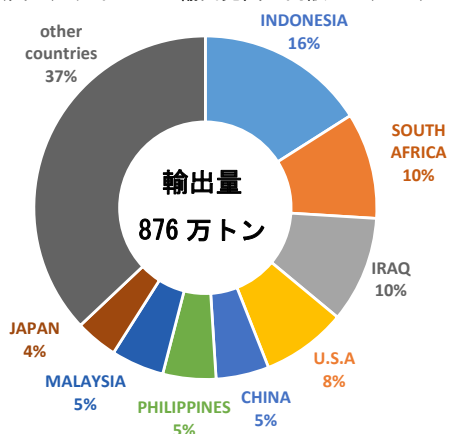
タイは世界有数のコメ生産国であり、世界のトップ3に入るコメの輸出大国です。タイ米輸出協会 (Thai Rice Exporters Association) によれば、2023 年におけるタイのコメ輸出量は合計 876 万トンであり、輸出先は、1 位インドネシア、2 位南アフリカ、3 位イラクと続き、日本は約 34 万トンで第 8 位となっています (図 1)。

2024 年 (1 月～8 月) のコメ輸出量は、インドネシア向けの輸出が約 1.5 倍、フィリピン向けの輸出が約 3 倍に急増したこと等により、前年同期比で約 22% も増加しました。背景には、インドネシアやフィリピンにおいて、エルニーニョ現象により国内のコメ生産量が減産の見通しとなるなか、コメ輸出大国の一つであるインドの輸出制限や競合関係にあるベトナムと比較した価格優位等により、タイからの輸入を増加させたためです。これにより、2024 年のタイのコメ輸出量は、前年を大きく上回る 1,000 万トン程度の水準になると予想されています。

また、2024 年 (1 月～8 月) の輸出額は、インドにおけるコメの輸出制限を発表した 2023 年 7 月以降、コメの輸出価格が上昇したことにより (図 2)、前年同期比で約 51% も増加しており、2024 年はタイのコメ輸出にとって「Golden Year」という声が聞こえてきます。

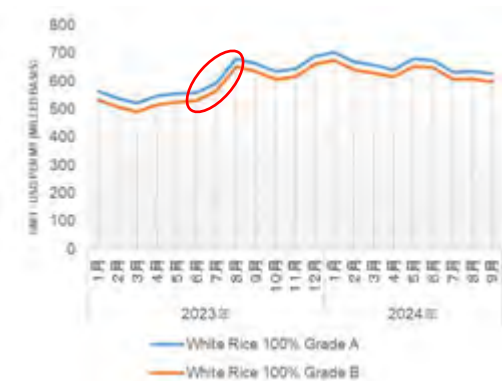
今後の見通しについて、2025 年はインドのコメの輸出制限の緩和及び撤廃、バーツ高による国際価格競争力の低下等により、タイのコメ輸出量は 750 万トン程度 (前年対比 25% 減) になると予想されていますが、タイは安定したコメ輸出国として重要な役割を果たしており、引き続き、世界のコメ需給を支えることに大きく貢献することが見込まれます。

(図 1) タイのコメ輸出先国の内訳※¹ (2023)



出典：タイ米輸出協会データより作成

(図 2) タイのコメ輸出価格 (FOB) の推移



出典：タイ米輸出協会データより作成

3 日本産米のタイへの輸出可能性

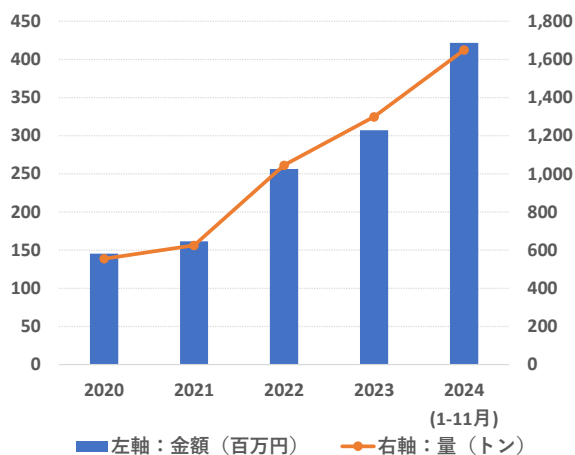
タイは世界有数のコメ輸出国ですが、近年、日本産米の輸出額は着実に増加しています。日本から輸出される精米^{※1}は、金額・量ともに、過去5年間で常に増加し続けています。2024年1月～11月までの精米の輸出額は、4.2億円となっており、2023年の輸出額を既に上回っています（図3）。

※1 タイによる植物検疫上の措置により、玄米としての輸出は、現在、行うことができない。

タイへのジャポニカ米輸出については、日本以外では、ベトナム、中国、オーストラリアにおいて実績がありますが、毎年着実に輸出できているのは、日本だけであり、2023年の輸出実績は日本のみとなっています（図4）。

日本産米の輸出が増えている背景には、タイにおける日本食レストランの増加が挙げられます。2024年度調査によるタイの日本食レストラン数は、5,916店舗となっており、前年から約3%増加しました（出典：JETRO Bangkok）。また、旅行などで日本を訪れたタイの方々が、日本産米の味を知り、本物志向の味を求め、ECサイトなどから購入する消費者も増えてきているようです。

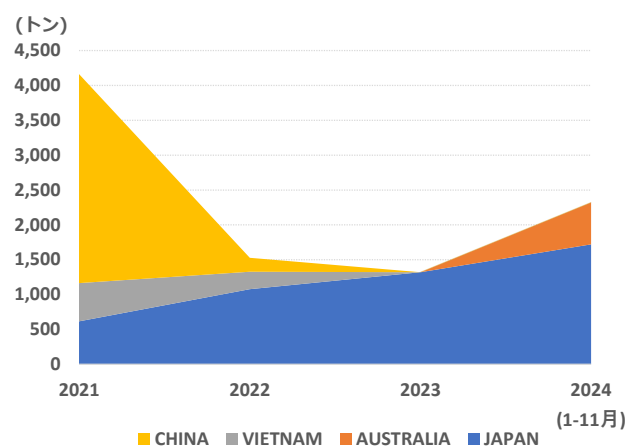
（図3）日本からタイへのコメ輸出の推移



出典：財務省「貿易統計」より作成

注：HSコードは100630000

（図4）タイによるジャポニカ米の輸入実績



出典：INFORMATION AND COMMUNICATION TECHNOLOGY CENTER WITH COOPERATION OF THE CUSTOMS DEPARTMENT より作成

注：HSコードは10063099015

タイ北部のチェンライ県などにおいても、ジャポニカ米を栽培しており、タイ産のササニシキ系やあきたこまち系の品種が流通しています。タイで販売されているタイ産ジャポニカ米の店頭販売価格は250バーツ程度/5kgとタイの一般的なコメよりは高価ですが、日本産米は、品種にもよりますが、最安値でも500バーツ以上/5kgで販売されていることが多く、価格差は2倍以上あります。

（写真）タイで販売されているタイ産のジャポニカ米



日本食レストランが取り扱うコメは、タイ産ジャポニカ米と日本産米が競合関係となります。現地でコメを取扱う事業者によれば、タイ産ジャポニカ米は、炊き上がりの過程でコメが壊れやすく、品質の面では、日本産米に優位性があるとのことでした。

今回は、タイの食事情としてコメを使った幅広い料理について紹介したいと思います。

文責：金永 忠之（在タイ日本国大使館 一等書記官）

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴などについてご紹介したいと思います